

## 論文

# 「ヘラクレイトスにおける『神の法』の処罰について」

柳 鶴 優子

### 1. 問題提起

ヘラクレイトス(以下H.と略記)の教義は、火を生命原理とする宇宙論<sup>1)</sup>と、この火と同質の、火的存在である魂<sup>2)</sup>に関する理論が中心になっている。それらの断片はだいたい短く、謎めいた言葉が使われ、幾通りにも解釈されるような仕方で語られている<sup>3)</sup>。しかし彼の断片の中には比較的長く、容易に理解ができると思われるものも含まれている。ホメロスやヘシオドスなど具体的に個人の名を挙げ、厳しい非難を表しているものもあるが<sup>4)</sup>、その中のエペソスの大衆に対するものは時事的であるということと、彼自身の政治的立場を明確にしているという点から我々の興味をひく。断片 121<sup>5)</sup>は次ぎのように述べている。

エペソスの、一人前の大人になった者はみな、首を縊って死んだほうがいい。そして、その国は子供達の手に委ねたらいいのだ。それというのも、ヘルモドロスのような、自分達の中では最も有能な男を追放したのだから、こういいながら。「われわれのところで、最も有能な男などひとりとしていてはならないのだ。そういう男がいるなら、ほかのところでよその人々のあいだで暮らせろ」と。

国家や政治の問題は、秩序正しく循環する宇宙から見れば、取るに足らないささいな出来事であるかもしれない。しかしそれが、健全な魂にとって著しく動搖を与えるような衝撃となる場合もある。体制の変化とそれに伴うヘルモドロスの追放は<sup>6)</sup>、政治の第一線から退き、哲学に専念しているH.にとっても、蚊帳の外の出来事として客観視できないほどの事件であったようである。彼はさらに断片 125 a で次のような警告も発している。

エペソスの人々よ、君たちが富に見放され、あげくのはてに不正の徒だということを天下に証明されることのないようになり。

人は国家や政治から全く遊離して生活することはできない。現実社会に起る様々な問題は、このような意味で、宇宙と魂のあいだに位置していると考えられる。本論では、

## 「ヘラクレイtosにおける『神の法』の処罰について」

H. がいわばこうした中間の問題についていかなる解釈を与えてているのか、宇宙や魂と同様に、火的本質という観点から説明することができるのかどうかについて、探求してみたい。

### 2. 宇宙的規制と雷

まず断片121と125 aがH.の教義においてどのような意味をもっているかという問題について考察する。断片121と125 aは現実の事件からH.自身が受けた印象、独白のようなものと受け取れる。それは、ヘシオドスが宇宙的正義を語るに当たり、ペルセスやバシレウスたちに対し不正な裁判を糾弾するという<sup>8)</sup>、現実に起きた出来事をもりこんでいるのに似ている。そこでは、不正な裁判をして正義女神を蔑ろにする者があれば、女神は即座に父神ゼウスにそれを訴える。訴えを聞いたゼウスは、しかるべき処罰を下すが、時として彼の処罰は一人の悪人だけではなく都市全体にも及ぶこともある<sup>9)</sup>。それほど正義を曲げる、不正な行いに対する神の罰は確実であり、また強大であることがヘシオドスによって主張されている。不正行為に対するヘシオドスの姿勢は、人間の *νόμος* よりも高位の、宇宙的正義を主張することによって表される<sup>10)</sup>。不正な裁判は、ヘシオドスの正義論にとってはひとつのかぎりであり、聴衆には卑近な例として引きつけられる、話のまくらのような役割をもっている。H.の断片121と125 aの大衆批判<sup>11)</sup>もこれと同様に、彼自身の宇宙正義論への導入として、とらえることができるのではないだろうか。その判断の正否は、しかし、彼の宇宙正義論の全容を明らかにすることによって始めて下されると思われる。彼にとって正義とは何か、不正とは何をさすのか、また不正に対する処罰はあるのか、それはどんなものか、それらは宇宙的循環の中でどのように関連してくるのか。これらの疑問を解明することが先決であり、むしろ宇宙論と魂論の中間の問題を明らかにするためには、そのことこそが明瞭にされるべき問題であると思われる。

ではH.は、ヘシオドスの「ゼウスの処罰」に対応するような何かを提示しているだろうか。ゼウスの処罰、ゼウスの武器というと「雷 *Kεραυνός*」である<sup>12)</sup>。H.は雷について次ぎのように述べている。

電光は万物を操り統べる (fr.64)

「操り統べる (*οἰλακίζει*)」とは本来「舵を取る」という意味で、そこから「支配する、案内する、運営する」という意味も持ち合わせる語である<sup>13)</sup>。「万物の舵を取る」と語られている雷は、従って万物がたどるべき宇宙的サイクルの「舵を取る」ということになる。万物がサイクルの軌道から外れないようにうまく運営し、宇宙世界にとって正しい方向を指示する役割を、雷は担っているのである<sup>14)</sup>。ところで、この「方向指示者」としての役割についてH.は、他のところでまた別の言い方をしている。そこでは、「万物を操る (*ἐκυβερνησει*)」のは、雷ではなく “*γνώμη*” となっている。そしてその “*γνώμη*” を

備えること (*ἐπιστασθαι*) が「唯一の知」である、と主張されている。

知はひとつである、それは万物をあらゆる仕方を通して操る知を備えることである (fr.41)

つまり H. は雷の機能を、知的なものであり *γνῶμη* であると考えていたということが、このことから推定される。雷は「永遠なる火の現れ」として認識されることから、火の知的な機能が雷であると考えることができる<sup>15)</sup>。が、あらためて宇宙の生命原理である火の威力—気象現象のひとつである雷を知的なものとするところに、H. の宇宙的正義論が成立する基盤があると考えられる<sup>16)</sup>。

ここでいう「知的」とは、それではどういうことなのだろうか。H. において雷と *γνῶμη* とが同様に扱われているのは、何を意味するのだろうか。H. は火について次のように述べている。

火が突然襲って来て、すべてのものを見分け、捕らえるだろう (fr.66)

「火が突然襲って来て」とわざわざ明記されている点を考えると、H. はこの火を、煮炊きや照明の火ではなく、なにか不慮の火事かあるいは天罰—雷のような、人知の及ばない何らかの現象を指して言っているように思われる。我々は断片66ともそれが接近していることから、この火を雷の火を意味するものと解釈し、雷の作用を表す断片として検討してみることにする。

まず、この「突然襲って来る」雷の火は、すべてのものの“何”を「見分け、捕らえる」のだろうか。このような火の作用を Charles H. Kahn は、燃焼と考える<sup>17)</sup>。そして「見分ける、判別する (*κρίνει-discern, judge*)」というのを、燃焼によって、対象が煙となって上昇したり、また水となって下降したりすることと解する。宇宙的なサイクルとしてのこの上昇と下降は<sup>18)</sup>、対象に対する火による報酬 (reward) と処罰 (punishment) を意味しており、ヘシオドスが示したような、ゼウスの雷が処罰だけを指しているのとは異なる H. の見解の特異性を、Kahn は提示する<sup>19)</sup>。彼によれば、対象（の魂）が乾いていれば報酬を、湿っていれば処罰が与えられるということである。

Kahn はまた上昇一報酬、下降一処罰の判別から、燃焼には *πόλεμος* と同様の働きがあると述べている<sup>20)</sup>。我々は *πόλεμος* について、それが「万物の父」(fr.53) であり「正義である」(fr.80) と語られていることから、万物のあらゆる変化を説明する原理として H. において指定されていると考える。つまり *πόλεμος* が「正義である」のは、その変化のプロセスが宇宙的なサイクルに則っていることによる。Kahn が燃焼を *πόλεμος* と同一であると解するのは、燃焼—雷の火の作用が、宇宙的なサイクルを正常なかたちで促進させていると考えるからにほかならない。雷によるその上昇下降の判別は、宇宙の秩序を混乱させるものではなく、正確なものであるのだ。雷の機能が「知的」という

## 「ヘラクレイトスにおける『神の法』の処罰について」

は、Kahn の説に従えば、このような宇宙的サイクルにおける促進作用とその正確な判別によると推察される。

雷の発現は、では何によるのだろうか。雷それ自体について、それがどうして生ずるのか、Kahn をはじめ K.R.S. も触れてはいない<sup>21)</sup>。ホメロスやヘシオドスの雷では、「ゼウスの処罰」—正義を犯す者に対する宇宙的制裁として、ゼウスや他の神々の意向が読み取れた。神々は人間達の行動のすべてに目を光らせ、まちがった行為には容赦のない罰を加える<sup>22)</sup>。正義を曲げれば、正義女神が、曲げたその人のあとを泣きながらついて行き、そして父神ゼウスに報告する<sup>23)</sup>。しかし Kahn の見解はそのような仕組みを考えない。燃焼による上昇下降の判断は、対象の乾き具合による。燃焼の時点で、それが乾いた魂かそれとも湿った魂か判断される。対象は処罰か報酬のどちらかを必ず受けることになる。Kahn において認知と執行は、全く同時に行われるのである。

ところで、H.の宇宙論の根本は、火↔水↔土の規則正しい循環である。その正常な循環を乱すもの、つまり宇宙世界の秩序を乱すものを、認知したり規制したりする機関はないのだろうか。もしあるとすれば、燃焼によって認知と執行が同時に行われるという Kahn の説と、どう関係してくるのだろうか。

### 3. 「神の法」と雷

H.において人間の *νόμος* よりも高位の宇宙的規制は、宇宙世界を秩序体ならしめている宇宙の理法—*λόγος* である。この *λόγος* は「唯一の知」(fr. 32, 41) とされ「ゼウスの名で呼ばれることを欲さないが、また欲する」(fr. 32) 神的なものである。それはまた「神の法」とも同定されている<sup>24)</sup>。

知をもって語ろうとするならば、人は万有のうちの共通のものにしっかりと基盤を置いていなければならない。ちょうどポリスが法に対するように、いやはるかにもっと強力な仕方で。というのも、人間どものあらゆる法は、一なる神の法によって養われているのだから。すなわち神の法は、意欲すれば、どこまでも限界なしにその支配をのばし、万物にとって充分であり、かつ十二分であるのだ (fr. 114)。

断片114は、「神の法」が人間の *νόμος* よりも高位にあって、支配を思いのままに拡大することができる、と述べている。柔軟でありまた強大なこの法は、神的な *νόμος* として、法則としての *λόγος* というよりも、むしろ *λόγος* の具体的な機能、あるいは権力そのものの姿を呈している。それはつまり、永遠不滅の火を意味していると考えられる。「知をもって語ろうとするならば…」という H. 的知、すなわち宇宙的 *λόγος* の認識を提唱する断片において、彼は宇宙の生命原理である火そのものの威力を述べているのである<sup>25)</sup>。「意欲すればどこまでも限界なしにその支配をのばし…」というのは、*λόγος* の深淵さを端的に表すと同時に、火の威力の大きさも示している。「意志する<sup>26)</sup>」ことで対象を支配することが可能な「神の法」は、すなわち「知的な」火の機能であると考えられ

る。

このように見えてくると、この「神の法」は、人々のあいだで永く守られてきた習慣や、文字に書かれた規則のような倫理社会的なものの、宇宙的に拡大普遍化したものではないことがわかる。我々は永遠不滅の火を核とした、真に自然学的な、宇宙的サイクルという体系を考えなければならない。「神の法」とはその体系のひとつの働きであり、正しい循環を乱すものを是正する機関ということができるのである。H.の宇宙的正義論は、秩序ある宇宙的サイクルが基本となっていて、万物がそのサイクルに従っていることで、宇宙の秩序は保たれている。そしてそのようなシステムは人間行動についても適用されると推測される。

さて、万物にとって規制の対象となるのは、正規の軌道から外れたり、またサイクルの巡りとして早すぎたり、遅すぎたりした場合であろう。H.はこのような正規のものからの逸脱に対していくつかの宇宙的規制を挙げている<sup>27)</sup>が、そのなかでも特に重要であり、またH.の思想の特徴を表しているのが先に述べた雷である。何故なら、雷は永遠不滅の火の現れであり、その知的な火の機能として「神の法」が認識されたからである。正規の循環から逸脱した対象に対する規制は、永遠不滅なる火の威力、すなわちこの雷をもって行われる。雷は、「神の法」の執行というかたちで機能しているのである。つまり、この規制が「知的」だと言われるのは、この「神の法」の、循環を乱すものに対する素早い察知と、雷を投げるという適確な対応を意味しているということになるのである。Kahnは、燃焼（落雷）による宇宙的サイクルへの促進作用とその正確な判別を「知的」と考えていた。我々が到達した「神の法」の機能の解釈から言えば、Kahnの理解は我々の言う後半の部分、すなわち「適確な対応」に当たると考えられる。

ところで、サイクルの巡りとして、早すぎたり遅すぎたりするというのは、実際にはどういうことを言っているのであろうか。H.は断片31と36で、火(魂) ⇄ 水 ⇄ 土の変化が正規の循環であると述べている。それと共に、この宇宙的な循環と同時平行して、個人のレベルにおいては魂について湿化の傾向が常にあることを、彼は語っている。

大人もひとたび酔えば、年端もゆかぬ子供に、連れて行ってもらうことになる、  
よろけながら、自分がどこへ行くのか知らぬままに。魂を湿らせたからだ (fr.  
117)

このように、飲酒は知的認知能力である魂を湿らせ、その機能を麻痺させる。しかし飲酒だけではない。

乾いた魂は最も賢明であり、最善である (fr.118)

とあるように、H.は乾性の高い魂ほど知的であり、また倫理的にも善であると考えている。そのような彼にとって、反対に愚かな行為や、倫理的に悪いものすべての背景に

「ヘラクレイトスにおける『神の法』の処罰について」

は、湿化した魂の存在があるとみなしていたことが推察される。人間行動における H. の解釈は、このように倫理的な善悪を、魂の乾湿というものをさして測りなおすことによって、宇宙的サイクルの中でとらえることを可能にしたと考える。

欲望と戦うことは困難である。それは望むところのものを、魂を代価として譲りうるのだから (fr.85)

今現在の乾性を維持することでも、通常の人間にはむずかしいことである。が、H. はさらに高い乾化を目指すことを我々に説く。H.には、魂について元来、永遠不滅の火と同様に、全く乾いたものという認識がある<sup>28)</sup>。完全な水化が訪れるまでは、魂は乾いていなければならない<sup>29)</sup>。しかし断片85にあるように、人は欲望に支配され、魂の知性的・理性的な声に耳をかたむけない。欲望による魂の湿化は、知的でも理的でもない、生きていながら実際には死んでいる人間の状態を表している。H.は次のように述べている。

湿気を帯びることは、魂にとって喜びあるいは死である (fr.77)

魂が死に向かっているのに対し、この時肉体はなお生の状態にある<sup>30)</sup>。個人の怠惰な姿勢は魂を湿らせ、みずから自身のサイクルを速めてしまう。それはある意味で、正規の循環に対する暴挙といえる。サイクルの巡りとして、正規のものよりも早すぎたり、遅すぎたりということについて、H.はこのように、魂に対する個人の日々の精進にかかる問題としてとらえているのである<sup>31)</sup>。

しかしいずれにしても、このような個人の魂一内の世界の変容が、直接大きな宇宙の循環にどれほどの影響を与えるのか、想像するのは難しい。宇宙的規制の機能は、循環の乱れに対して発揮されるが、個人レベルでの湿った魂が、どのようにして宇宙の循環の乱れとなるかはわからない。だが、内的世界だけに止どまっていたものが、外的世界にも現れた時、それは明確に宇宙的な視野でとらえることができるのではないだろうか。例えばヘシオドスにおいて見たように<sup>32)</sup>、外的世界つまり人間社会の規制を裏ろにするもの、それが宇宙的規制の対象となるのは明らかのように思われる。

人間社会の規制としては、H.においては *νόμος* が機能している。湿った魂は、*νόμος* の対極にあるものとして位置づけられる。それは *νόμος* が乾いた魂と関係していることを意味している。H.は *νόμος* について次ぎのように述べている。

人々はノモスを守るために戦わねばならない、ちょうど都城を守るために戦うように (fr.44)

また彼は断片33において、

ただ一人の意志に従うこともノモスである

と言っている。この「ただ一人の意志」とは、「最もすぐれた人々」(fr.29) のひとりであり、「最上の人」(fr.49) を指している。そして彼らの魂が、「最も賢明で、最善」(fr.118) な、乾いた魂であることは、容易に推定されることである。H.にとって、*vómos* は乾いた魂の結晶であり<sup>33)</sup>、乾いた魂は、場合によってはそれだけでも *vómos* に匹敵すると考えられている。魂は火的存在であるから、*vómos* もまた火的なものということになる。この火的存在は、魂と同様に、知性的理性的な性格をもつ。乾いた魂と湿った魂の対立は、このように現実社会という場では、*vómos* の侵害というかたちをとって表れる。しかし通常 *vómos* を侵害するもの、*vómos* と対概念にあるものは *βρος* である<sup>34)</sup>。H.において *βρος* はどのようにとらえられ、また湿った魂とどのように関係してくるのであろうか。

#### 4. *βρος* と魂

断片43は、H.によって言及された *βρος* に関する唯一のものである。

火事よりもむしろヒュブリスを消さなければならない。

K.R.S.はこの断片について、「彼の倫理観の実際的な面が、いかに伝統的かを示している」と解し、「人間行動についても魂の火的本質という観点から、常に解釈されるとは限らない」と述べている<sup>35)</sup>。これに対し Kahn は、*βρος* を火的なものと見、人間行動において知的魂に反する行為がいかに破壊的であるかを語る。彼は断片44の、「都城(the city wall) を守るために、人々は法を守るために戦わねばならぬ」に言及して、次ぎのような解釈をする。つまり、都城を破壊する外敵はポリスの住民全体を脅かすが、火事はその周辺の住民を脅かす。人は外敵からポリスを守るように、法を守るために戦わねばならない。*βρος* は *vómos* を無視する暴挙である。人は *βρος* から *vómos* を守るために戦わねばならない。そしてそれは火事以上に急務である、ということである<sup>36)</sup>。*βρος* は火的なものであり、そしてそれは社会的レベルにおいて *vómos* と対立している。我々は先に、魂を火的なものと解釈した。魂も *βρος* もどちらも火的なものということになる。Kahn は魂と *βρος* を対立させて考えているが、その考え方をもう少し詳細に知るために我々としては、H.において魂と *βρος* がどのような関係にあるのか、H.の他の断片から探求してみることにする。個人的レベルの魂に何が生じ、いかなる経過を経て社会的レベルにおいて現れる *βρος* と関連してくるのか、これらのことが判明することによって、我々は *βρος* の宇宙的な位置を知ることができると考える。

断片85では、「魂を代価として贖」ってまで望むものを手に入れようとする「欲望—*θυμός*」について述べられていた。それは、魂の湿化に大いに関係するものとして解された。Kahn はこの断片85の解釈において、*θυμός* は *βρος* へと発展する傾向があると述べている<sup>37)</sup>。今一度断片85を取り上げ、魂と *θυμός*、そしてそれらと *βρος* との関係を見てみる。

## 「ヘラクレitusにおける『神の法』の处罚について」

「魂を代価として」、「魂を犠牲にして」(“*ώνειται*”)とは、どういう状況をいうのだろうか。日本語で「欲情」と訳される“θυμός”(文中“θυμῷ”)の訳語として、K.R.S.も Kahn も、“passion”あるいは“anger”を当てている<sup>38)</sup>。Kahn は、『イリアス』におけるアキレウスの行動に言及し、単なる「心情」(“heart”)ではなく、その本人も含めて、周囲の状態を破壊的な方向に導く「激情」であると主張する<sup>39)</sup>。そして、後のヘラクレitus派の人々が、魂を一種の「蒸気」と見ていることに着目して、θυμόςもまた“ἀναθυμίασις”(蒸散作用)という点で理解できると述べ、θυμόςは魂と同様に火的なものであるという見方を、Kahn は提出する<sup>40)</sup>。激情の火が「魂を代価として」欲するものを手に入れるということは、Kahn によれば、「激情型の火」である θυμός が、「理性的、知的な火」である魂の乾性を奪う、ということである<sup>41)</sup>。同じ火的なものではあるが、しかし θυμός は魂を湿化させ、魂の知的な機能を鈍らせるのである。

先にも触れたが、Kahn は、このような θυμός が βρέπις への傾向を含んでいることを指摘している<sup>42)</sup>。個人のレベルでおさまっていた θυμός と魂とのあいだの葛藤が、βρέπις へと向かうその過程で、魂がどのように変わっていくのかということについて、H.は何も語っていない。βρέπις は単に θυμός の大きくなったものではなく、νόμος と対立しており<sup>43)</sup>、両者の関係を発展としてとらえるには、いささかむずかしいように思われる。しかし魂の湿化として θυμός から βρέπις への移行を考えた場合、我々に想定できることは、βρέπις をなす人々の魂について、非常に湿化が進んでいるということ、それと同時に、βρέπις の火性が θυμός のそれよりもずっと高い、ということである。

それでは、その βρέπις の火性とはどういうものなのだろうか<sup>44)</sup>。「火事よりも消すべき」と、わざわざ火事と比較されて語られているのは、βρέπις が破壊力をもった一種の火として H. によってとらえられていたことを物語っている。そしてそれは、火事よりも強大なものと推定されることによって、一旦消してしまえば力を持たない普通の火事とは異なる様相を、我々に示している。つまり βρέπις とは、一度消してもいつまでもくすぶり続け、またいつ燃え上がるともかぎらない根絶に苦労する性質の悪い火であり、燃え上がったらなんであれかまわず破壊する火と考えることができる。このような無秩序で強大な破壊力をもつ火は、既製の秩序を外的的にも、内面的に崩壊してしまうのである。

ところで、Kahn は断片 43において、危険で破壊的な火を示すことによって H. は πόλεμος に対する称賛に制限を加えていると指摘している<sup>45)</sup>。すなわち、火的なものは本来称賛されるべきものであるが、「共通の良きもの」を破壊する火というかたちでそれが現れた場合には、それは否定されるものということになり、H. にとっては自分の πόλεμος に対する称賛に、限定を加えざるをえなくなってしまうのである。この指摘に先立ち、Kahn は、「火事よりも βρέπις を消すべき」という意味について、火事よりも βρέπις の方が「共通の良きもの」を破壊する「程度」が大きいからだと解している<sup>46)</sup>。我々は先に“πόλεμος”を、宇宙的サイクルにおける変化の原理と定義した<sup>47)</sup>。βρέπις は破壊作用であるから、πόλεμος の性格をもっている<sup>48)</sup>。火事や βρέπις が否定される理由

として、それらが「共通の良きもの」を破壊するからというのは、妥当であると思われる。が、*ὕβρις* を宇宙の秩序を乱す無秩序な火とみなした我々としては、やや違った説明ができるのではないだろうか。

火事には、放火と失火がある。失火は、人のちょっとした不注意や落ち度から生じる。この場合、人は何か悪意があって火事を起こすのではない。しかし、どんな原因があるにせよ、知的な乾いた魂から見れば、それはより湿化した魂の仕業ということになるだろう。一方放火の場合は、犯した人の意志は明らかであり、その者は悪意をもって火をつけたのである。その行為は *ὕβρις* とみなすことができる。火事と *ὕβρις* はこのように不可分の関係にあり、全く切り放して取り扱うことは難しい。だが、H.は火事と *ὕβρις* を分けて考えている。Kahn の言うように、両者を分けるその違いを、「共通の良きもの」を破壊する「程度」の違いとするとも考えられる。だが、魂という観点から両者を見るることもできるのではないだろうか。例えば、断片43における火事への言及が、単にその火性と破壊力を *ὕβρις* に投影させるためだけのものだと考えるとしたら、H. がこの「火事」に対してどれだけ魂的なものを見ていたのか、推し量ることができるだろうか。むしろ *ὕβρις* の火性と魂との関連が、「火事」によって強調されているように我々には思われる所以である。生じてしまった火事は、一種の *πόλεμος* と考えられるが、*πόλεμος* であるということ以上の意味を我々は探すことができない。しかし我々は *ὕβρις* について、その背景には *θυμός* と *θυμός* による湿化した魂が存在していることを確認した。それゆえ *ὕβρις* は、宇宙的サイクルにおいて無秩序な火であると考えられた。*ὕβρις* と魂の関係は、いわば直接的なものと言える。*ὕβρις* の存在は湿化した魂の存在に根ざしている。それは乾いた魂の結晶である *νόμος* を蔑ろにし、無秩序な火として宇宙的サイクルを乱す。*πόλεμος* は正義であり、称賛されるべきものであるが、しかし魂の乾化を第一と考えるH.にとって、*ὕβρις* は明らかに否定されるべきものと考えられたと思われる。

さて、無秩序な火として *ὕβρις* は、魂を湿化させる *θυμός* に由来し、宇宙的サイクルを乱すものと認識された。このような現象は、前述したように、宇宙的規制の対象となる。ヘシオドスにおける「ゼウスの正義」の主張は、曲がった裁判への非難が発端となり、人々のあいだで正義というものが通用しなくなった社会において、宇宙的な正義の存在とその処罰の威力を、正義女神と父神ゼウスの権力を称えることによって、唱えるものであった。H.においては、「神の法」が宇宙的な規制機関となり、その執行として雷が発現する。すべてのものは、火↔水↔土の循環を基本に、このサイクルに従って進まねばならない。しかし *ὕβρις* はこのような正常な循環を乱す。その発生において *ὕβρις* は、湿化した魂の存在と *νόμος* の崩壊を示している。無秩序な火性。湿化した魂の存在。「神の法」は、これらの宇宙的サイクルを乱す動きに素早く反応し、そして察知し、適切な処置を施す。雷の発現は、永遠不滅なる火の現れとして、「神の法」の処罰というかたちをとって現れ、*Ὕβρις* を処罰する<sup>49)</sup>。「神の法」は、*Ὕβρις* の程度を見極め、どれほどの雷を発すべきか適確に判断する。これらの機能は「反応」であり、宇宙的循

## 「ヘラクレitusにおける『神の法』の処罰について」

環におけるシステムのひとつの作用であるが、その正確さゆえに「知的」とも呼ばれるのである。

我々は最初のところで断片121と125 aについて言及した。エペソスの人々に対するH.の非難は、このような宇宙的正義論を背景にしていたと考える。断片125 aの警告は、彼らの所業が宇宙正義論の上からも反しており、いつか必ず雷の処罰が下されるということを語っているとみることができる。「あげくのはてに…ないよう」という言葉は、H.の宇宙的正義論に対する自信に裏打ちされた発言であると思われる。

以上、我々は、H.において果たして宇宙正義論は存在するのかという疑問に始まり、万物を操り統べる雷の解釈と、 $\theta\mu\mu\sigma$  や  $\delta\beta\sigma\sigma$  といった今まで宇宙論とは関連付ける仕方では扱われてこなかった問題について、H.の見解を再検討してきた。それによって、宇宙的規制機関として「神の法」があること、雷は「神の法」の執行であること、そして  $\delta\beta\sigma\sigma$  は「神の法」の処罰対象であって、雷によって処罰されることなどが確認された。これらのこととは、彼の宇宙論・宇宙正義論の構築が、厳格な宇宙的サイクルの指定とともに、魂の乾湿による人間行動の解釈に基づいていたということの再認識につながるものと考える。

### 注

1 H.において火は実際には  $\alpha\eta\theta\eta\mu$  を意味している。火というのはそれ自身不変でありながら、それ以外の他のものすべてを破壊し、変化させる力をもつ。更に火は熱を有す最も乾いた要素であり、我々の目に見える生命的な概念として類似の様相を示している（『西洋哲学史』上巻シェヴェーグラー谷川徹三・松村一人訳 1990<sup>62</sup>

（1939）岩波書店58頁照）。火は宇宙生成以前より存在し、生成以後もなお生き続け、宇宙世界という有機体の核になっている（fr.30）。それは火そのものの内に後に形成される宇宙のプログラムが包含されていることを意味している。形成された宇宙世界は秩序をもったものとしてその機能を果たし続けることができるが、それは永遠にではなくある期間をもって再びすべてが火に帰する日が来ることを物語っている（cf. fr. 90）。

2 fr. 31とfr. 36の関係から。

3 fr. 93にあるように、神託ふうの謎めいた言葉によってその奥に潜む真実を聴衆自身が探り、理解することをH.は意図していたと思われる。fr. 6, 12, 21, 26, 27, 48, 52, 60, 62, 63, 98, 103, 107, 115などが例として挙げられる。

4 fr. 40, 42, 56, 57, 106, 129など。

5 本論で言及している断片はすべて Diels, H. et-Kranz, W., *Die Fragmente der Vorsokratiker*, 6 th ed., Zurich 1985 (1951) による。

6 詳しい状況は不明だが、当時のペルシア帝国との関係から、何度かエペソスにおいて政変が生じたようである。cf., Charles H. Kahn. *The Art and Thought of Heraclitus* Cambridge U.P. 1983<sup>63</sup> (1979) p.3

7 この断片については偽作とする研究者もいる。G.S. KirkやKahn、T.M. Robinsonなどがそうである。

- 8 Hes., *Erga.*, 9,35-40.訳については、松平千秋訳ヘシオドス『仕事と日』(1986: 岩波書店)を参考にした。
- 9 Hes., *ibid.*, 238-247,256-260
- 10 不正な裁判が行われたこと、そのこと自体をヘシオドスは人間の *νόμος* が踏みにじられたことと述べてはいない。それは正義が曲げられたことと意識されている (cf., Hes., *ibid.*, 261-2,264)。
- 11 エペソスの大衆に対する批判と受け取られるものについては、他にもいくつか挙げられる。frr. 1,2,5,17,19,104. それらは、しかしヘラクレイトス的な知をわきまえない、彼らの無知な点を非難したものであるが、frr. 121,125 aは、大衆の実際の行動そのものが主題となっている。
- 12 ホメロスにおいては、人間の領分をわきまえずに、神を蔑ろにする者に対して、ゼウスは雷—*Kεραυνός* を落として、その者の命を奪っているが (*Od.* 12, 416-9, 14,305-6,23,329-32)、ヘシオドスにおいては、ゼウスが人間どもを处罚するのに、雷を落とすだけでなく日照りをも起こしている (*Erga.*, 238-47)。
- 13 cf., Liddell- Scott-Jones, *A Greek-English Lexicon* Oxford, 1978 (1940)
- 14 cf., Kahn, *op. cit.*, pp.271-2, T.M.Robinson, *Heraclitus*, Toronto U.P. 1987, p.187. Robinson はH.に関する二次的な資料として、Aëtius の証言を紹介している。彼は、雷鳴や稻妻について、自然学的・気象学的な説明を伝えており、我々が真正断片として扱っている宇宙の「方向指示者」としての雷とどのように関連していくのかが興味のわくところである。
- 15 cf., Kahn, *ibid.*, pp.273-4, Robinson, *ibid.*, p.186, G.S.Kirk, J.E.Raven and M.Schofield, *The Presocratic Philosophers* Cambridge U.P. Second Edition 1987<sup>4</sup> (1983) pp.198-9 (本文中においては‘K.R.S.’と記す)
- 16 cf., Kahn, *ibid.*, p.274
- 17 Kahn, *ibid.*, p.273
- 18 cf.fr. 60 「上り道も下り道もひとつで同じものである」
- 19 Kahn, *ibid.*, p.273
- 20 Kahn, *ibid.*, p.273. K.R.S. もまた同じく、燃焼には *πόλεμος* と同様の働きがあると述べている。K.R.S., *ibid.*, p.199
- 21 Kahn は、自然現象としての火は、「宇宙的な知の具体的なものであり、道具である」と述べているが (cf., Kahn, *ibid.*, p.274, l.17)、宇宙的な体系の中でどのように機能しているのか示していないように思われる。K.R.S. も同様に、宇宙的秩序を維持するための知的な働きとして、雷が機能してということは提示されているが、システムのどのような仕組みで雷が発現するのか明らかにしてはいないと考える (cf., K.R.S., *ibid.*, pp.198-200.)。
- 22 注12を参照。
- 23 Hes., *Erga.*, 222-3,256-60.
- 24 cf., Kahn., *op.cit.*, p.277.
- 25 cf., G.S.Kirk, *Heraclitus, The Cosmic Fragments* Cambridge U.P.1978<sup>5</sup> (1954) p.50
- 26 「意欲すれば——*ξθέλει*」

『ヘラクレイトスにおける『神の法』の処罰について』

- 27 「決して没することなき存在の目（太陽？）」(fr.16)、正義女神(fr.28b)、復讐の女神達(fr.94)が挙げられる。宇宙的サイクルの逸脱に対するものとしては、fr.94の復讐の女神達による太陽への執拗な追跡が明らかなものであるが、正義女神や「存在の目」については、それらが宇宙的規制として機能しているということ以外、あまり明白にはその姿をとらえることができない。
- 28 frr. 31,36
- 29 廣川洋一著『ソクラテス以前の哲学者』講談社1987、106-107頁参照。
- 30 cf., Kahn, *op.cit.*, p.243.Kahnは、これを「もうひとつの死」(l.20)と解している。
- 31 廣川氏は、「その人の魂の劣化、液化はそれ自体必然の道ではあるにしても、それを正しい限度のうちにとどめる、人間的努力と精進が（ヘラクレイトスにおいては）求められている」（前掲書、107頁2-3行引用、カッコ内は本論筆者）と述べている。
- 32 自分の有利な裁定を得るために、バシレウスたちに対して賄賂を送ったペルセスの行動や、その賄賂を受け取って、不正な裁判をしたバシレウスの行為(Hes., *op cit.*, 35-40)。
- 33 cf., K.R.S., *op. cit.*, p.212
- 34 cf., W.K.C.Guthrie, *A History of Greek Philosophy* vol. 1 The earlier Presocratics and the Pythagoreans. Cambridge U.P. pap. 1985<sup>8</sup> (1978) p.410. fr. 43に対する言及において、彼は *ὕβρις* と *νόμος* を対立させて考えている。
- 35 K.R.S., *op. cit.*, p.212
- 36 Kahn, *op. cit.*, p.241
- 37 Kahn, *ibid.*, p.243
- 38 K.R.S., *op. cit.*, p.208 n.2, Kahn, *ibid.*, p.242
- 39 Kahn, *ibid.*, p.242,
- 40 Kahn, *ibid.*, p.243
- 41 Kahn. *ibid.*, p.243 Kahnは、それを一種の自殺行為だと評している。
- 42 Kahn, *ibid.*, p.243
- 43 cf., Guthrie, *op. cit.*, p.410
- 44 *ὕβρις* の根底には *θυμός* があると考えられることから、*ὕβρις* もまた、激情型の火とみなすことができる。Kahnは *θυμός* について、魂と同じく火的なものであっても、それは fr.118の「最も賢明で最善である」乾性さや鮮明さとは区別されると述べている(Kahn, *op.cit.*, p.243)。つまり、*θυμός* や *ὕβρις* は火的ではあるが、乾いた魂に比べてやや温氣を帯び、鮮明さに欠ける「情炎」のようなものと言えるかもしれない。
- 45 Kahn, *ibid.*, p.241
- 46 Kahn, *ibid.*, p.241
- 47 frr. 53,80より
- 48 Robinsonもまた *ὕβρις* を一種の *πόλεμος* と考える姿勢を示すが、彼は、Kahnのように、H.の *πόλεμος* 観にひとつの規定——「共通の良きもの」を破壊するものは、それがたとえ一種の *πόλεμος* であっても、否定されるべきものである——を設

けていない。Robinson は、fr.43 を純粹に社会倫理的な意味で解釈して *βρεις* を否定している。しかし彼は fr.53 の解釈において、自然の大きな変化や国同士の戦争、都市の内紛や個人の心の葛藤も含めたあらゆる変化は、「あらゆるもの操り統べる」(fr.41) 法則の不可欠な部分として見られる、と述べている (Robinson, *op. cit.*, p.185)。

49 この「神の法」の対応—処罰が、果たしてホメロスにおいて述べられているように、正確に当人だけにふりかかるかどうかは疑わしい。ホメロスにおいては、たとえ同じ船に乗っていても、太陽神の神聖な牛を食べなかったオデュッセウスは絶命することなく、永らえている (*Od.*, 12,416-25)。H.においてはむしろヘシオドスの処罰に似ていて、雷の被害は都市全体に及ぶとも考えられる。重要なのは、*βρεις* に対して必ず「神の法」は対応てくるという点であり、それは、H. 独自の宇宙体系に則っているということである。